

市民協働と健康でふるさと創造を 合併後の新市まちづくりと活性化

個性的な9地区がそろって新生・日南市

宮崎県日南市は平成21年3月、旧日南市と隣接する旧北郷町および旧南郷町の1市2



油津港に飴肥杉を運ぶため開削された堀川運河。奥の石橋は「男はつらいよ」のロケ地としても知られる

町による合併で、新生・日南市としてのスタートを切った。

日南市という市名の歴史は、昭和25年に旧南那珂郡飴肥町・吾田町・油津町・東郷村が合併し、市制が施行されたときに始まった。その後、昭和30年に細田町・鶴戸村、翌31年に榎原村(大窪地区)・酒谷村との合併を経て、今回の平成の合併へと至る。

その結果、現在の日南市は非常に個性的な地域性を有する9地区によって構成されることになった。

まず、市役所本庁や官公庁、市内最大の企業・王子製紙(株)日南工場が立地する人口集中地域・吾田地区。吾田地区は商業集積の面でも市内最大の地区だ。吾田地区の西側内陸部に隣接する飴肥地区は、江戸時代に飴肥藩の城下町として栄えた歴史と伝統のまち。九州の小京都とも呼ばれ、九州で最初に重要伝統的建造物群保存地区に選定された、歴史的景観をとどめたいかにも城下町らしいまち並

市域南側に目を転じると、プロ野球・埼玉西武ライオンズのキャンプ地としても知られるカツオ一本釣り日本一の漁業のまち南郷地区がある。市域北側の北郷地区は、林業とスイートピー栽培で知られる。特にスイートピーの出荷量は日本一であり、今回の取材では出荷直前の状態を撮影することができた。



風光明媚な日南海岸を走るJR日南線の観光特急「海幸山幸」(毎週末運行)は日南観光を活性化させた

さらに日南市にとって待望久しい、東九州自動車道のインター建設地でもある美しい田園地帯・東郷地区。日南海岸の中央にあり、昭和40年代の新婚旅行ブームや海幸山幸神話の舞台で、神武天皇の生誕地でもある鶴戸神宮の存在で全国に知られる漁業とかんきつ栽培のまち・鶴戸地区。日本の棚田百選「坂元棚田」で知られる田園地帯・酒谷地区。大堂津港および快水浴場百選「大堂津海水浴場」のほか「みやざき地頭鶏」の産地で知られる細田地区などがある。

だが歴史をさかのぼれば現在の日南市一帯は、律令体制時代において日向国・宮崎郡飴肥郷と呼ばれるほぼ同一の地域だった。中世には飴肥北郷(現在の日南市北部および北郷地区周辺)と飴肥南郷(日南市南部および南郷地区周辺)に区分され、近世には飴肥藩として宮崎市南部までが統治されていた。

「近代以降は県制・町村制の再編が相次いだため、各地区は独自の発展を遂げるようになりました。しかし、元をたどれば生活圈・文化圏という意味で昔から非常に交流が深かったわけです。特に近年は広域行政圏などで常に気心が通じていましたが、そうした歴史の変遷を経た上での合併が実現したおかげで、現在の日南市は非常に多様なポテンシャルを持つ都市になったといえるでしょう」

そう語るのは谷口義幸日南市長である。さらに、「これからはその多様性を生かしつつ、いろ

みが観光客の人気を集めている。

吾田地区から東側(海側)に進むと、昭和初期に東洋一のマグロ漁港といわれた油津地区がある。油津は明治・大正・昭和初期にかけて飴肥杉の積み出し港として国際的に知られ、48年前からプロ野球・広島東洋カープのキャンプ地としても知られている。

当時の栄華の名残は、内陸から酒谷川を経由して届いた飴肥杉をさらに港に運んだ堀川運河のたたずまい、運河に架かるアーチ型の石橋、れんがや銅板を多用した商店や倉庫などの建築物に色濃く伝えられている。

いろいろな意味での無駄を省きながら一つの方向性を持った地域づくり、新しい日南市づくりへ結び付けていかなければなりません。そのためにはまず各地区に住んでいる人々が、自分たちのふるさとの良さをきちんと知る必要があります」

と続ける。そうした観点から、谷口市長が新生・日南市のスタートとともに満を持して創設したのが協働推進課(現・協働課)だった。

協働推進課の創設に込められた思い

「市民の公益活動を促進する協働推進課(現・



日本一の出荷量を誇る北郷地区のスイートピー



谷口義幸
日南市長



大堂津海水浴場とともに「快水浴場百選」に選ばれた富士海水浴場

スポーツ大会、清掃活動)などに際し、必要性が認められれば市所有の備品や公用車を貸し出す。

これまでに防犯パトロールカー5台、ダンブカー1台、1tトラック1台、ワゴン車1台、広報設備付き軽箱バン2台の計10台が、燃料代無料で市民に貸し出され、活用されてきた(防犯パトカーは平日の朝夕のみ。全車両とも使用は土日・祝祭日の7時~22時)。ちなみに本年1月の実績では延べ38台の貸し出しがなされた。

また備品はテント、いす、机、法被、簡易放送設備など43品目が貸し出し対象となっており、こちらも利用料は無料だ。



約400年間にわたり地域の林業を支えてきた飢肥杉の美しい山並み

協働課)の創設は、新生・日南市での最初の仕事となりましたが、そこに至る準備は、旧日南市時代から始まっていた(谷口市長)

谷口市長は新生・日南市の初代市長であると同時に旧日南市最後の市長でもあった。現在は通算3期目となるが、不転の覚悟による行財政改革の推進とともに、市民協働の積極的な推進は1期目就任時のマニフェストだった。そのため谷口市長は市民協働の推進を前提に「市政運営基本条例」を平成16年12月に策定し、「市政一新計画」(行財政改革計画)を翌17年11月に策定している。その上で平成19年3月には「市民協働まちづくり基本方針」を策定。本格的な市民協働体制実現のための布石を着々と打っていた。

具体的には「市民協働まちづくり基本方針」の策定後、合併による協働課創設(平成21年4月)に至るまでの約2年間にわたり、以下のような各種施策が展開された(現在も継続実施中)。

東郷地区の地域協議会をモデルとする地域連携組織の設立(現在は新たに3地区が設立準備)／公用車と備品の市民への貸し出し／魅力あるまちづくり実践事業による市民活動への原材料費支給／NPO法人の設立認証、相談受付の開始／「輝く市民協働大賞」による活動団体の表彰と10万円の奨励金創設／NPOパートナーシップ創造事業の開始(市民が企画・実施する公益事業のうち、その必要性が認められた事業への補助金交付)

行財政改革は言うまでもなく、自治体が政策的にも財政的にも自立し、自らの生きる道を自己責任の下に決定し、推進していく上で必要不可欠の作業だ。その実現のためには市役所のスリム化はもとより、すべての職員が行政のプロとして常に自己啓発を図りつつ、自らの知恵と汗とで市民の負託に応えていく姿勢を示していく必要がある。

それがなければ、これからの市政運営の基本であり、行財政改革にも不可欠な市民協働の気運を高めることは不可能だろう。

谷口市長が旧日南市最後の5年間に着々と準備を重ね、新生・日南市の最初の施策として、満を持して協働課を創設したのは、まさにその姿勢を市民および職員の双方に示した

また最近目立ちつつあるのが「魅力あるまちづくり実践事業」における原材料費支給ないし現物支給の制度だ。写真にもあるように、例えば里道の修繕(酒谷地区)などについては、地区市民の要請で原材料を支給し、コンクリートミキサー車などの手配を市が行っている。



市が実費や資材を提供して市民がわがまちをつくる「魅力あるまちづくり実践事業」(酒谷地区の里道修繕事業にて)

「(一)承知のように道路事業は常に喫緊の案件に追われており、地区内の里道の修繕といった細かな事業は後回しになりがちです。市民が自力で実施してくれば、市も助かるし市民も待たされずに済みます。費用も安く済む。自分たちの地域の修繕を自力で行うことにより、地域への愛着がさらに増す効果もあります」(谷口市長)

これら市民協働事業推進に関する日南市の体制は、窓口および実戦部隊としての協働推進課(現・協働課)の存在だけではない。副市長を会長とする協働推進委員会(副会長は教育長、委員は各部長)を設けるとともに、各課係長以上の職員が横断する形で構成される庁内協働推進担当者制度をも設置。協働施策



日本の棚田百選にも選ばれた「坂元棚田」(酒谷地区)

めだったといえる。

「行財政改革の断行にはもちろんさまざまな壁があります。しかし、職員にも市民にも現状をきちんと説明し、理解を求めていけば不可能ではありません。行政はこれまであれもこれもやるのが「よく働いていること」の証しのように考えられてきました。しかしこれからは市民との協働で大事なものを選択し、本当に必要なこと(もの)を集中的かつ確実に実現していかなければなりません」(谷口市長)

日南市における市民協働の関連事業でユニークなのは、「市の公用車や備品の貸し出し」事業だ。市民が行う公益事業(防犯パトロール、見守り活動、地域の祭礼・イベント、

の推進、各種調査協力、研修事業を実施するなど、手厚いバックアップ体制を整えているのが特徴的だ。

本年2月には新生・日南市になって初めての「日南市総合計画」と、その実現のための財源を確保する「第一次日南市行財政改革大綱案」ができた。市民参画による日南市のまちづくりがいよいよ本格化する支度は整った。

市民協働でよみがえった飢肥地区のにぎわい

今回の取材では個性あふれる日南市9地区のうち、北郷地区、飢肥地区、吾田地区、油津地区、南郷地区の5地区を駆け足で訪ねることができたが、市民協働のまちづくりという観点から強く印象に残ったのは、飢肥地区における「飢肥城下町」食べあるき・町あるき事業」だった。

飢肥地区にはこれまでも年間約20万人の観光客が訪れていた。しかし、そのほとんどは飢肥城内の観光が目的で、重要伝統的建造物群保存地区に選定されたまち並みがあるにもかかわらず、まち歩きをする人は少なかった。そのため商店街は寂れ、後継者も育たず、高齢者や空き家ばかりが増えるという悪循環に陥っていた。

もともと飢肥地区には熱心なまちおこしグループが多い。美しいコイの泳ぐ水路の整備、花や植物の植栽、川の浄化などさまざまな活動が行われていた。そうした市民



老若男女の市民が健康をアピールする「笑顔がいちばん元気にちなんフェスタ」

に、目標達成に効果的なプログラムを開発・実施し、市民や職員の意識改革を図ってきた。この事業も現在では実践事業へと進出し、大きな効果を挙げ始めています」（谷口市長）

日南市では特定健康診査でメタボ予備群に判定された市民には「当選おめでとう！」という招待状が市役所から届く。今日からメタボ解消の仲間となり、みんなで頑張りましょうというメッセージをユーモラスに表現したものだ。これが意外に好評を博したという。

現在ではメタボ予備群の市民を中心に「元気にちなん応援隊」が発足。メタボ解消、健康増進をテーマとする各種イベントなどに熱心な市民が数多く参加するようになった。その成果が評価され、平成21年夏開催の「第26回『健康なまちづくり』シンポジウム」（厚生労働省主催）で、日南市の取り組みは先進事例として紹介されている。

「日南市には花卉類を含む多彩な農産物があります。400年近くもの歴史を持つ飫肥杉の生産や、豊かな漁獲量を誇る漁業があります。それらをはぐくむ美しい海・山・里の自然があります。環境にも配慮した生産体制で大きな雇用を生んでくれる製紙業は、日南市には欠かすことのできない基幹産業の一つで、その厳密なコンプライアンス順守の姿勢は、地域の生きた社会教材です。プロ野球はもとより、サッカーリーグの湘南ベルマーレや横浜FCがキャンプ地に選ぶ温暖な気候があります。そうした風土のすべてを守り、培ってきたのはまさにここで暮らしてきた先人の英知です。



製紙業は日南市に大きな経済効果と雇用をもたらしている基幹産業の一つ(王子製紙)



飫肥城下に江戸時代から伝わる泰平踊は県の無形民俗文化財指定

市長としての理念を一言で表現すれば「市政は経営なり」に尽きます。私の役割はこうした地域の豊かなポテンシャルを、いかによい方向へと導き、新生・日南市の活性化の礎を築くかにあると考えています。市民協働と職員も含めた市民の健康づくりは、その大前提としての基本です」（谷口市長）

1000年以上もの長い時間をかけた紆余曲折の末、平成の合併でかつての日南国・飫肥郷の姿に近い市域を取り戻した新生・日南市。歴史と伝統に培われたその「古き良き革袋」に入れられようとしている「新たな酒」は、とても芳醇にして、清新の気に満ちている。

(取材・文 遠藤 隆)



埼玉西武ライオンズの南郷キャンプは広島東洋カープの日南キャンプと並ぶ春の風物詩

「この飫肥城下町『食べあるき・町あるき』事業は、イベントなどの一過性のものでなく、通年で実施できるものであることが、素晴らしいアイデアだと思います。まさに市民協働による知恵と汗の総力が実現したヒット企画といえるでしょう」（谷口市長）

飫肥城下町『食べあるき・町あるき』事業は、JR日南線で現在人気の高い観光特急「海幸山幸」（宮崎・南郷間を毎週末運行）が運行開始する前の平成21年4月から実施されている。その波及効果の具体的な集計はまだ出ていないが、取材の過程でも地区の隅々まで観光客が食べ歩き、まち歩きしている様子は如実に感じ取れた。

グループの力を結集すると同時に地域全体に観光客を回遊させる仕組みづくりはないか。そのように考えた財団法人・飫肥城下町保存会の職員を中心に、市民、市、商工会議所、観光協会などが各種検討した結果、生まれたのが飫肥城下町『食べあるき・町あるき』事業である。

飫肥地区には歴史的まち並みや歴史資料館などの飫肥城由緒施設と共に、伝統的な食文化が残されている（独特の厚焼き玉子、和菓子、焼酎など）。そこで区内の有料イラストマップを制作し、施設巡りのクーポン券、食べ歩きのクーポン券を付けた。例えば施設（5カ所に入館可）巡りだけのクーポン券付きイラストマップは600円、施

設プラス食べ歩き（5カ所で試食可）のクーポン券付きイラストマップは1000円といった具合だ。

取材の際にも後者のイラストマップを活用してみたが、個々には一口サイズの厚焼き玉子、せんべい、和菓子なども、5つ続けて食べるとけっこうおなかがいっぱいになる。また文化施設巡りの合間に食べ歩きを行うことにより、飫肥地区の主要部分を自然に回る仕組みになっているのは非常に面白い。

この仕組みを作るに当たっては、岐阜県郡上市（郡上八幡）の先行事例を大いに参考にさせてもらったとのことだが、クーポン券付きイラストマップは飫肥地区独自のアイデアだという。



大勢の市民・観光客が集まり海の幸が勢ぞろいする「港あぶらつ朝市」(毎月第2、4日曜)

日南市の礎は市民協働と市民の健康から

市民協働の推進とともに、谷口市長が1期目当初から力を入れてきたのが「健康にちなんの推進」および「元気にちなん応援隊」事業だ。谷口市長が市長に就任した平成16年度に「国保ヘルスアップモデル事業」の指定を受け、メタボ根絶に向けての「宣戦布告」を打ち上げたのが始まりだった。

その後、市職員の保健師や栄養士が中心になって、高齢化の進む市民のメタボを少しでも解消するための目標を順次立てるとも